

安全と安心は別問題

食の安全・安心という言葉をよく耳にする。食品安全委員会は、食品の安全を中立公正に科学的に評価する機関である。そして、この評価を受け、管理機関である厚生労働省、農林水産省、消費者庁などが実際の管理措置をとることになる。このような制度に基づき我々日本人の食の安全は確保されている。

一方、食の安心はどのようにしてもたらされるのであろうか。安心とは、心を安んじると書く。心、気持ちの問題である。信頼と言いかえてもいい。安全と安心は次元が異なる話である。大切なのは、科学に基づく安全の話と、心や気持ちの問題である安心の話は分けることである。

毒性はリスク評価の前提

食品の安全性の話は自然科学に基づいている。食品健康影響評価(リスク評価)とは、例えば残留農薬などの化学物質をヒトが食べた時、その物質が吸収、代謝される過程で、どのような毒性学的影響が、どの程度起きるかを予測することである。

よく食品の安全に疑問を投げかけるような文言に「これこれの毒性を示す食品添加物が使われている」とか「ヒトに毒性を示さないとは言い切れない」というような表現を見かけるが、これらの表現には注意する必要がある。毒性をみる試験では、そもそも毒性が出るところ

まで濃度を上げて試験するのであり、毒性が出るのはあたりまえだからである。

科学的な考え方が重要

食品のリスク評価は確率であり予測である。100%安全である、とは断定できないから、安全係数(動物実験のデータのうち毒性を示さない最小の量を人間に置き換える場合に、その値を何分の1かにする係数。通常100分の1にする)という考えも導入されている。

リスク評価では、その時点でできる科学的に最も妥当な選択をして、それを修正していくしかない。○×的な考え方をやめ、確率的判断をするよう努力することが大切である。このような科学的考え方、すなわち食の安全の仕組みを理解してもらえば安心が生じると考えられるが、そう簡単にはいかない。

食の安全は高まっている

メディア情報を見ていると、食の安全性は昔に比べて下がっているような錯覚に陥る。現代の食の生産過程を見ると100年前には使用されていなかった様々な農薬、食品添加物が使われ、20年前には存在しなかった遺伝子組換え作物が世界各国で生産されている。その結果、食の安全性は下がったのであろうか。明らかに「否」である。100年前より20年前、20年前より現在の方が食の安全性は高まっている。日本人は毎日食事をして、その平均寿命が延びているのであ

るから、日本人全体の食環境や健康状態がよくなっていることは明らかである。日本の食中毒統計を見ても、食中毒による死者は一貫して減っている。昭和30年は554人、昭和50年は52人、平成7年は5人と漸減し、平成21年度にはなんと0人になった。このように現実の食の安全はどんどん高まっているのに、なぜか安心とは結びついていない。これは果たして行政機関の説明不足、理科教育や食に関する科学的教育の足りなさのためだけであらうか。

安心を生むものは?

消費者がすべての科学技術や科学的な安全性評価を理解することは不可能であらう。また、専門家の間でも常に意見が100%一致するとは言いえない。この辺りが安全から安心に移行しない難しいところでもある。

安心と信頼はかなり近い関係にあることを述べた。安心については、食品安全委員会を含め、厚生労働省、農林水産省などの公的機関が、国民や一般消費者からどれだけ信頼されているかが重要である。情報源、説明者自体が信頼されていなければ、そこから出てくる情報や説明は信頼されない。安全と安心の溝は意外に深い。その溝を埋めるには、科学的説明だけでなく、相互の信頼関係を築く不断の努力が必要となろう。



食の安全への不安・疑問から情報提供まで、皆様のご質問・ご意見をお寄せください。

食の安全ダイヤル 03-6234-1177 ●受付時間:10:00~17:00/月曜~金曜(ただし祝日・年末年始はお休みです)

Eメール受付: <https://form.cao.go.jp/shokuhin/opinion-0001.html>

食品安全委員会 e-マガジン登録 <http://www.fsc.go.jp/sonota/e-mailmagazine.html>

●「食の安全ダイヤル」「e-マガジン登録」は、食品安全委員会のホームページからもアクセスできます。

食品安全委員会ホームページ: <http://www.fsc.go.jp/>



内閣府 食品安全委員会事務局

〒107-6122 東京都港区赤坂5-2-20 赤坂パークビル22階 TEL:03-6234-1166